The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イスパニア語に及ぼしたアラビア語の影響
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1957, 5, p. 95-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80126
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イスパニア語に及ぼしたアラビア語の影響

吉　田　秀　太　郎

La influencia árabe en el español.

HIDETARO YOSHIDA

Introducción

El presente trabajo tiene por objeto aclarar algunos puntos característicos de la lengua española en su formación a través de la historia. Bien sabemos que es el español una de las lenguas de familia latina designadas con el nombre de las neo-latinas o romances como el francés, el italiano, el portugués y algunos otros. Sin embargo, no suele prestarse la debida importancia a un hecho de singular relieve en la historia de este idioma, que es la cuota de paternidad que corresponde al elemento islámico en la gestación del español.

Los nueve siglos de coexistencia de los pueblos de distinta religión, cristiana y musulmana, y de distinto idioma, neolatino y árabe, tuvo que originar inevitablemente un contacto de ambas culturas con influjo recíproco.

Aquí nos fijamos en el aspecto maramente lingüístico de este fenómeno. Desde luego, es imposible explicar algunos fenómenos lingüísticos sin tener la idea clara de cómo vivieron material y espiritualmente los pueblos de aquella época. Da aquí que hemos hecho algunas exposiciones de la vida española bajo la dominación musulmana, o más exactamente, en la convivencia cristiano-musulmana, al referirnos a los vocabularios de orígen árabe, a los aspectos semántico, fraseológico y sintáctico en que se observan los hechos de gran interés. Como ya hemos visto arriba, las influencias son mutuas; española al árabe, y vice versa, siendo mayos la última, pero nos limitanos aquí a exponer, como dice el título, el elemento árabe en el español.

序

イベリア半島の最西端に位し，西欧中でも地理的に見て最も西欧であるイスパニアが，皮肉にも他の欧洲諸国とその性格を異にしている事実は，科学の各部門の証明するところである．言語学的に云っても，なる程，イスパニア語は，ポルトガル語，フランス語，イタリー語等と共に，いわゆる neo-latin として分類されてはいるが（尤もこれは当然の事である），その中に伺われる

九世紀にわたる回教徒との共存生活から来た．興味豊かな言語的諸印象は，イスパニア語を学ぶ者にとっては，無視すべからざるものである．彼等回教徒の生活文明は，キリスト教徒たるイスパニア人に比して，極めて高度なものであった．それ故に一層，このアラビア文化の半島文化に及ぼした影響は大きいのである．本稿に於ては，回教徒文化の中でも，特に，言語学的立場から見た諸要素と，それが生ずるに至った，乃至はそれをはぐくんだ社会的環境の観察を行い，現代イスパニア語と，それを国語とするイスパニア人の理解を一層深めん事を期待している．

第　一　章

アラビヤ人の侵入に至るまでのイスパニアと，その言語的基礎

いわゆる Magdalena 文明から今日に至るイスパニアの歴史は極めて変化に富み，興味ある研究対象である．今，アラビア語のイスパニア語に及ぼした影響をみるに当り，我々はその直接の動機たる，アラビア人のイスパニアへの侵入と云う歴史的事実に目を向けなければならない．而も，その前に，更に，侵入に至るまでの substratum としてのイスパニアの姿について観察する事が，問題の在家を明確にする上に，是非必要だと考える．アラビア人のイスパニアへの侵入は世歴711年（我が国では平城奠都，古事記の成った奈良時代初期）にはじまり，その統治は，コロンブスのアメリカ大陸発見の年で知られる1492年まで，即ち約8世紀にわたっている．こゝに8世紀間とは，アラビア人が政治的主導権を握っていた期間であって，それ以後も，彼等は依然，此の地に住みつき，17世紀に至るまで（Felipe III は1609年彼等に対し追放令を出している）居住していた事を考慮する際，事実，彼等二民族の共存は9世紀にわたる訳である．アラビア的要素が，イスパニア人の生活にとり入れられたのは此の期間に於てである．尚これについては後述する事にして，711年に至るまでのイスパニアの歩んだ歴史的足どりをたどってみよう．イスパニアが外国の侵入を受け，征服されたのは，これを以て，即ちアラビア人の侵入を以て嚆矢とするのではなく，それ以前に，有史以来，被征服者としての数々の辛酸をなめてきている．

或る歴史家によれば，イスパニア人の祖先は，恐らく，当時まだ熱帯だったと思われる時代に，この地に渡来したアフリカ大陸系の住民だろうと言う．土民としては北方にクロマニオン人，南方にイベロ族が居た．クロマニオン人は穴居生活を営み，洞穴に画かれた動物の絵で有名である．イベロ族の起源については諸説があり，定説はない．兎に角，イスパニアの有史は，外国の植民地として出発しているところに特徴がある．イスパニアは，彼等植民者の残した，いわゆる文化遺産を蓄積し，今日に至っている．現代イスパニア人乃至はイスパニアの性格が殊の外持つ多面性は，こんなところから来ているのである．

先づ，フエニキア人は，Andalucía の西部地方，特に現在の Cádiz の中心地として，西紀前11世紀から同4世紀にわたって住んでいた．前4世紀頃，フエニキア人の商敵，ギリシア人が Málaga の近くの Menaca に来り，フエニキア人が西海岸地方を占有したのに対し，東部海岸，つまり現在のGerona 洲以南の地域を占めていた．彼等の文化的影響としては，Dama de Elche と称せられる女の胸像があるが，これは，イオニアのものを模倣したものである．Emporión と云う都市を建設したのもギリシア人だった．ケルト族は，ライン地方即ち北フランスに住んでいたが，前10世紀と4世紀の二回にわたりイスパニアの地に足を踏入れた．Tarteside 人〔古代イスパニアの一地方に住んだ土族〕に攻撃され，救助の求めに応じたカルタゴ人は，此の機を利してイスパニアの中央部近くまで進んでいった．彼等は，結局，救いを求めた者をも併せて征服した訳である．此の手口は，やがて，ローマがイスパニアを征服する時にも用いたのだった．事実，ローマのイスパニア征服は，前2世紀に開始された．ローマ軍は，ピレネー山脈の北西麓のバスク地方を除いて，イスパニア全土を占領した．ローマ軍のイスパニア侵入と，イスパニア人の必死の抵抗は，Numancia に於ける合戦（152—1322）で有名であり，不朽の名作 Don Quijote の作者 Miguel de Cervantes も劇作品“Numancia”でイスパニア人の涙ぐましい抗戦ぶりを描き出している．ローマのイスパニア征服がもたらした影響は極めて大きい．これによってイスパニアは社会的，言語的，宗教的並びに法政上の統一乃至は大変更と併せて，物質文明の強度の普及と科学，文学，芸術の導入がなされた訳である．Segovia の高架水道，Medinacelí のローマ門をはじめ，学校，劇場などが旧ローマ植民地の面影を残している．特に今問題とする言語については，イスパニア語が，後に見る如く，アラビア語の大きな影響を受けたにも拘らず，フランス語やイタリー語と同様，ロマンス語と呼ばれている事実によっても，如何に，ラテン語がイスパニアの地に徹底したかがわかるであろう．それは，当時のローマ帝国の文化水準が被征服地のそれに比べて非常に高かった事による事は勿論ではあるが，同時に，此の征服が，バスク地方を除いて全面的であったと云うことも見逃すべからざる理由の一つである．ラテン語から neo-latin としてのイスパニア語への変遷については，稿を改めなければ，到底述べ尽せるものではない．只，かゝる優秀な文化を有するローマ人の言語たるラテン語も，少なからず，外来語を有している点を指摘しなければならない．その一例を挙げれば，ケルト語からは camisia なる語を得，後これがイスパニア語の camisa（ワイシャツ）となった．cerveza（ビール）も元来ケルト語である．その他ケルト語から来たラテン語として *lat.* carrus>*esp.* carro（車）及び *lat.* carpentarius（車大工）>*esp.* carpintero（大工）; *lat.* vasallus>*esp.* vasallo（家臣）．又，バスク語からは Garsea > *esp.* García（人名）Enneco>*esp.* Iñigo（人名），Xemeno>Jimeno（人名），ezquerr> *esp.* izquierdo（左の），pizarra（黒板）．ギリシャ語からは一般的概念或は知

的活動を表す言葉が採用された．イタリアの南方の Magna Grecia との接触はローマ人の精神的進化に大きな力を与えたのだった．idea（思想），fantasía（幻想），filosofía（哲学），música（音楽），poesía（詩），matemática（数学）等々．

ローマ帝国下におけるイスパニアは，法政上，帝国の第二の国であったと云える．Trajano, Adriano などの皇帝が，イスパニアから輩出した．キリスト教が彼等の精神的支柱となり，これがいわゆる“ローマ化”を促進して大いに功があった事は云うまでもない．西歴三世紀頃から崩壊の道をたどった帝国は，遂に409年ゲルマン民族（vándalos, suevos, alanos）の侵入を許すに至った．414年には，更に Galia 地方の Aquitania に根據地を有する西ゴート族がイスパニアに侵入した．そして征服を完うしたのは西ゴート王 Eurics（467—486）で Toledo に居を定めた．しかし最後の賢王 Wamba（672～680）を以て，西ゴート王国は傾き出した．彼等の持つ過激な性格と勢力争いは，王位継承をめぐっての貴族間の不断の内紛となり，遂に Rodrigo 王に至って此の王国は滅亡した．去年（1955年）の10月に逝ったイスパニアの哲学者 Ortega y Gasset は著者“España invertebrada”（無背椎のイスパニア）の中で，現代イスパニアの呈している異常な，余りにも異常な姿は，その原因を遠く西ゴート族に帰している．彼は，この西ゴート族が，ゲルマン民族中，最も弱く，無気力であった事を指てきしている．彼は，西ゴート族が300年にわたるイスパニア征服にも拘らず，何らこれと云う建設的な事業を行わなかったのを遺憾に思うのである．すると，言語上は百余の単語を残したに過ぎぬゴート族も，思いの外大きな影響を（これは大きな影響に違いない．たとえそれがネガティブな意味であるにせよ）及ぼした事になる．西ゴート王国の政治的最盛期は562年から681年にかけてゞあった．西ゴートの芸術は一般にビザンチン文化の模倣であったが，しかし彼等独自のものを持たぬではなかった．例えば，San Juan de Baños の教会に見られる（661年建築）様な basilica（大会堂）を持った型の教会は彼等独自のものである．ゲルマン族は，イスパニアに侵入する前，即ち1世紀から3世紀にかけて，ローマ人と頻繁に交通を行っていた．彼等の繁き接触から，多くの言語交換が行われた．ゲルマン人はローマ人から商業，農業，工業及び法律上の用語をとり入れ，ローマ人は，ゲルマン人から石けん（jabón）の製造を教わった．俗語ラテンに導入されたゲルマン系の単語は可成りある．が，飽くまでも可成りであって，アラビア語などゝ比較する時は物の数ではない．好戦的なゲルマン族の生活は戦争する事にあった．軍事用語の少くないのも蓋し当然であろう．guerra（戦争），guardar（貯蔵する），robar（盗む），yelmo（胃）など．

やがておこったのが，アラビア人のイスパニア侵入である（711年）．このアラビア人は，ゲルマン民族の大移動の最中に，Mahoma の教義によって聖戦をおこし，中央アジア及び北亜の地帯を席巻し，勢に乗じて遂に，海峡を渡ってイスパニア及び南部フランスに侵入を企てたのだった．

彼等は7年足らずの間に Toledo, Hispalis, Córdoba, Mérida, Tarrasco, Cesaraugusta 等. ローマ及びゴート文明の中心地をはじめ，イスパニアの要所を手中に収めてしまった．こゝに，ローマ＝ゴート文明を素地とするイスパニア文明と，海をへだてた南の大陸から新しく渡ってきたアラビア文明とが対立し，それが，時を経て次第に融合してゆくのである．

第　二　章

アラビア人による統治下のイスパニア

簡単に云って，711年の侵入から1492年の滅亡までは，3つの期間にこれを大別する事が出来る．すなわち 第1期は711年から932年までで，これは，キリスト教徒たるイスパニア人から見て，反叛と英雄主義の時代であったと云える．一般にアラビヤ軍の侵入と共に，ラテン語が忘れられたと云う説があるが，これに強力に反対している言語学者も居る．実際，当時の事は余り判然としない様で，お互に，自己に有利な資料だけを云々している場合が多い様に見受ける．しかし，何れにせよ，ラテン語が速かにイスパニア人の国から消え失せたとは考えない方が正しいと思われる．第2期は932年から1099年に至る期間で，いわば服従の時代である．キリスト教的な国民精神は殆んどなくなり，その代り，musulmán（ムスルマン）文化が栄えた時代である．特に Sevilla 王国ではそうであった．1099年までとしたのは，此の年が almorávides（イスパニアに侵入した別の党派）の mozárabes（イスパニア人なるもアラビヤ人に従属している者をこう呼んでいる）を迫害した年であり，これまでと違って，イスパニア国内に大変革がおこったからである．この時代には romance 語即ちラテン語から出来た初期のイスパニア語は殆んど忘れられていた．ムスルマン達は大てい二ケ国語を駆使していた．第3期は1099年以降で，1099年の almorávides の侵入に次いで1146年の almohades と云う別の種族のイスパニア侵入で特徴づけられている．此の時代は mozárabes が大量移民し，著しく数が減少した．そして，やがて再征服軍に見事敗北するに至る訳である．以上の事を念頭に置いた上で，アラビア人の侵入当時から滅亡に至る間のイスパニアの国状を今少し掘下げて見てゆこう．

西ゴート王国の政治的，軍事的弱点につけ込んでイスパニアに侵入した回教徒軍の主力はモーロ人だったが彼等の生地 Mogreb は，Califato（カリフ）と称せられるアジアの回教徒王国に属していた．7世紀以前には，彼等は放浪生活を営み，全く統一がなかった．Jeque と呼ばれる酋長を頭に頂いて生活する者も居た．この時突如として現れたのが，熱烈な宗教家であり，政治的野心家だった Mohoma であった．彼は，これまで彼と同族の者共が崇拝していた様々な神

や偶像から，彼の創り出した新しい宗教へと導いていった．この新宗教の理念は，キリスト教及びユダヤ教からこれを得，只一人の神，アラー Alah の存在を宣し，死者の蘇生と，善人は天国に行き，悪人は地獄に陥ると云う最後の審判，或はその他の信仰事項を唱導した．信者には，一日五回は祈禱を捧げ，一年に一と月は断食をし，又施物を行い，一生に一度は必ずメッカの寺院を訪ねる事を命じ，これを聖典（Alcorán）に書きとゞめた．彼の死後，後継者は，征服したアジア及びアフリカの諸民族に，いち早くこの宗教を拡めていった．彼等は帝国を築き上げ，その首都は Medina に次いで Damasco，更に Bagdad と変っていった．この帝国は当時の世界では最も強大な軍事力を有していた．その最盛期には，アジア，アフリカ及びヨーロッパにわたる広大な地域を占有していたが，ヨーロッパだけについて云うなら，南部イタリア，バレアレス諸島，シシリー島，サルジニア島及びイベリア半島の殆んど全部を占めていた．その将軍は Emir 及び Califa の称号を享受していた．Mogreb の回教徒が既に述べた通り8世紀にイスパニアに侵入したのは，時あたかも西ゴート王国が王位継承をめぐって各派に分れた貴族間に只ならぬ事態が発生し，その一派たる，Rodrigo 王により退位を余儀なくさせられた前王 Witiza の息子の助けとしてやってきた訳で，これがそも，イスパニア征服の起源であった．歴史はくり返すか，援助に来た友軍が居直って恐るべき敵となった例は，既に，イスパニアの土地で，一再ならず見た通りである．全イスパニアを平定するに僅々7年を要したに過ぎぬアラビア軍の破竹の勢は，余り敵の無力に気抜けして，かえって九仞の功を一簣に欠くうらみを残したのである．つまり彼等はその勢で，徹底的にイスパニア全土を征服する事なく，ゴート族をそれ以上追跡するのを止めて，Califato 及び Emir の至高権を認めるならばと云う条件で，被征服者に宗教，言語，法律，主権までも許して，こゝにイスパニアをして Emir より揮いられる回教徒の Califato に属する一洲（emirato）たらしめた．これは，ローマ帝国のとった政策と大いにその趣きを異にしている．そして，これこそ，やがてイスパニアをして再征服を可能ならしめた事は勿論，九世紀にわたる長期の征服にも拘らず，ラテン語を根本的に忘れしめ，国語の大改革を行い得なかった大きな理由である．尤も，それが，現在のイスパニアにとって幸であったか，不幸であったかは，即断を許さない．兎もあれ，イスパニア人が，アラビア人の進んだ文化を吸収し，そしゃくして血肉となし，更にその勤勉さが古来あまねく知れ渡っているアラビア人を，国民の要素として持っていたならば，十六世紀以降のイスパニアの姿は更に興味あるものであろうと察せられる．イスパニアにおける再征服の機運は，征服された当時からすでに生じていた．そして八世紀にわたるイスパニアに於ける，キリスト教＝回教的生活の二面的な生活が，相反し乍ら而も相容れ，一種独得の雰囲気を作った一方，北部では常に再征服のための小ぜり合いがしきりに行われていた．イスパニア人は，兎に角，国民の名誉にかけても，このアラビア人を国外に追放せねば止まぬと意

気込んでいた．それにも拘らず，内心は，やはり，彼等より一段と秀れた文化水準に，只，一種の complex を感じ乍ら，何時ぞや彼等を凌がん，いや，少なくとも彼等に追つかん，と心中大いにあせっていたのである．アラビア統治下のイスパニアにおける両民族の共存する姿は，実にイスパニアならでは見られぬものだった．それは大海にも似て，中央部では，その水量豊かにして，あたかも鏡の如く，唯，遠い磯辺では寄せては返す荒波が昼夜絶ゆる事がないのにも似ていた．Toledo は360年の後，再びイスパニア人の手に帰し，Sevilla は530年間の被征服の後，再びイスパニア人のものとなった．

記述が前後するが，Emir 中最も才たけた人物だった Abderramán el Gafeki (730〜732) はイスパニア征服が一応終るや．Galia 地方を征服せんと企てたが，Poitier の戦に敗れその目的を達しなかった．かくて征服は，イスパニアだけにとゞまった．アラビア統治下のイスパニア人の姿を描き出すとき，それが，学者により，夫々異っているのは不思議である．それは大別して二つの傾向を有し，その一つは，どちらかと云えば幾分イスパニアに味方した述べ方と，反対に，アラビヤ人に味方をした書き方である．何れにせよ，事実は只一つしかない筈で，我々は，それら，両者の記述を一手にして，その中間を行く線に沿うより他仕方がない．何故なら，お互に我田引水をやっている中にも，一応歴史的に実証される事実があるが故に，両者を照合する事によって，更に一層その視野を，第三者の立場に立って，広める事が出来るからである．

キリスト教徒にしてアラビア統治下に居る者を mozárabe を称した事は既に述べたが，彼等は宗教的に，政治的に，又言語上，回教都市に於て一つの別世界を形成していた．しかしアラビヤ人との接触は勿論さけ難く，依然として，ラテン語を話してはいたが，次第にそれが不純になり，遂には，会話は殆んど皆，アラビア語になった．アラビア語が次第に重要となった有様を Córdola 生れの mozárabe Alvaro が，彼の著書の中で次の様に述べている．時に九世紀の中葉，

「自分と同宗教の者の中にもアラビア人の詩を読み小説を読む者が大勢居る．又，回教徒の哲学者や神学者の著書が盛んに読まれるが，これは何も反駁せんとしてではなく，むしろ，何うすれば，最も上品で正確なアラビア語で表現出来るかを習ぶためなのだ．自分の才能を発揮して出世してゆくキリスト教徒の青年たちは，みな，アラビア語及び文学を知っており，又熱心にアラビア語の書物を読んだ．そして巨額を投じて図書館を設ける有様だった」そうでない場合でも，辺境ではキリスト教徒と回教徒が絶えず接触（だが戦い乍ら）しているので，ひとりでにその言語を覚えてしまう．しかし結局は，Califato のとった政策から，ラテン語は依然として存続する事になった．

はじめ Castilla 王国がイスパニアの独立或は再征服に大きな力となったが，後，十一世紀の初期には（イスパニアにおける）キリスト教国は León（Galicia 及び Asturias をも含めて），

Castilla, Navarra 及び Aragón の四つとなった．そして再征服の士気は愈々高まっていった．一方，Califato では，回教徒間の内乱に，次第に軍事力衰え，徒らにキリスト教徒を喜ばしめるに至った．しかし乍ら，軍事力でこそ，今は弱化したが，Califato における回教徒の文化は燦然たるものがあった．キリスト教徒イスパニアは，やがて武力でこそアラビア人には打勝つが，文化の点からは，甚だ恥かしい姿だった．

Califato の中学校ではコーランの読み書き，詩，作文が教えられ，大学では宗教的伝統乃至は聖書，コーランの講釈，論評がなされ，同時に文法，医学，法律，文学（歴史を含んで）が学ばれた．回教徒の知識の基礎はギリシャ，ローマの書籍で，特にギリシャのが主であった．彼等はそれをアラビア語に訳したのである．当時欧洲諸国では，政治的野心に燃えていて，ギリシャ，ローマの文化的伝統をやゝもすれば忘れ勝ちだった時の事とて，彼等アラビア人の，こうした努力は，極めて意義深いものであった．彼等は更に，西アジアの，中国，印度等における科学や芸術も導入吸収し，それらの模倣から一歩進んで，彼等独自のものを創り上げていった．かくてアラビア人は，古い文化の維持者として，又同時に新しい思想や発見の所持者として，世界でも最も教養ある国民となった．十一世紀における Ripoll の僧院はアラビア科学，特に数学の普及の中心地だった．Córdoba の Califato の図書館は60万冊の図書を擁し Andalucía には50の公立図書館があった．彼等の活動は，文学，数学のみにとゞまらず，芸術一般，建築，農業，牧畜，商業，その他あらゆる生活面に秀でゝいた．貴金属細工にしても，織物にしても，みんな，イスパニア人が模倣する事となった．

回教徒の生活の繁栄ぶりは十世紀に至ってその絶頂に達していた．Córdoba は特にそうで，20万戸の家を持ち，600の回教寺院，900の銭湯（これは後，再征服後破壊を命ぜられ今は残っていない）には各階層の人が集った．Córdoba は当時世界でも最も豊かな都市だった．道路は石が敷きつめられ，家々へは管で水が引かれていると云った有様だった．Mezquitas（回教寺院）の中最も有名なものは，21のとびらと大理石，斑入大理石で作られた1200本の柱の上部は金が用いられてあった．その説教壇は象牙や高価な木材で使られ，百余の燈立ては殆んど銀製だった．musulmán の生活は，一般に，Córdoba 程ではなくとも，ほゞこれに準じたもので極めて繁栄していた．これをキリスト教徒たちに伝播したのは mozárabes 達だった．又，アラビア人の征服の及ばなかった地域，即ちキリスト教徒のイスパニアにまでこの影響は及ぶ事になった．面白い現象と云えば云えなくもない．イスパニア人による再征服が進捗するにつれて，彼等の捕虜となってキリスト教イスパニアに連行された人々（mudéjares と呼ばれている）がその役を勤めたのだった．それは丁度，Córdoba におけるイスパニア人の地位と同様なものだった．お互に主義を異にするにも拘らず，各王室の異民族間の結婚，これ即ち政略結婚で，その犠牲になる

者の心を誰か知る，こうした結婚が初期に於て屢々行われた事や，Castilla や Aragón 王国の国王が稀ならず Córdoba に旅した事などが相互の影響を一層深める事となった．これも一時の事で，再征服が次第に進むにつれ，イスパニア人の態度は硬化しはじめた．再征服成った土地へはキリスト教イスパニアに住みたいと願う mozárabe や回教徒の捕虜を住ませ，農耕に従事させた．

11世紀における Córdoba の Califato の崩壊から13世紀にかけての期間は，イスパニア史上，あらゆる点に於て最も重要な意義をもつ時期であった．即ち次の三大事項がそれを証明している．

1. キリスト教徒による再征服の画期的進ちよく．
2. 8世紀以来設けられた各々の政治の中心の中央集権化．
3. ロマンス語の誕生と発達（gallegos, castellano, catalán）

再征服の英雄は，Ruy Díaz de Vivar，又は回教徒から贈られた名前 El Cid Campeador であった．これは英雄詩 Poema del Mio Cid の主人公と同じであるが，如何にも力強く，而も優雅に，人間味豊かな英雄の姿が描かれている．11世紀にはじまった前後八回にわたる十字軍の遠征にイスパニアは参加しなかったが，事実，国内でそれと同じ役割を果していた訳である．13世紀に入って Almohade の侵入を最後に回教徒は次第に政治的，軍事的力を失っていった．しかし文化は依然としてその光を放っていた．Zaragoza には哲学者 Abempace，数学者Abraham-bar-Hiya が居たし，建築では Mudéjar と称せられる新様式が採用され，全イスパニアに拡がった．

Reyes Católicos の Granada 攻撃を以て，8世紀にわたるアラビヤ人の政治的首導権は，再びキリスト教徒の手に戻り，イスパニアはキリスト教徒の国となった．回教徒はやがて国外に追放される身となった．時に1492年．イスパニアは新しいエネルギーに満ちて？今しがた発見された新大陸へと雄々しく躍動した．しかし，8世紀にわたる彼等回教徒の残した拭うべからざる足跡を遮二無二拭い去らんとしたイスパニアを待ち受けていた運命の神は，必ずしも頬笑まなかったのである．アラビア人の国外追放と，国内産業の荒廃の間には余りにも深い関係がある事を歴史は証明している．

第　三　章

アラビア起源のイスパニア語単語

前章に於てはイスパニヤ人とアラビヤ人との共存生活について述べた．が，むしろそれは政治を中心としたものであって，本章では特に，本稿の中心テーマである言語自体について考察せん

とするものである．就中我々の興味を呼ぶものは，征服者としての回教徒の文化的優越性，及び彼等のとった特異な政策（宗教，法律，言語等の自由を許したこと）と更に進んで，彼等回教徒が，自らキリスト教徒と交った点である．若し，この共存と云う事がなかったとしたら，征服者回教徒は，或は案外早くイスパニアの地を離れていたかも知れない．それは，キリスト教徒の再征服を目指す攻撃よりも，むしろ外国の干渉によるものだったろうと考えられる．何故なら，一度ピレネー山脈を越えれば，隣国は，強大なカルル大帝が，虎視眈々としてイスパニアをねらって居たからである．兎もあれ，こうした事実は，深く現代イスパニア人の精神生活の中にまで影響する事となったのみならず，その秀れた生活文化は，既存の neo-latin 語にまだ大きく作用する事となった．アラビア人が，イスパニアの占領と共に，土地の婦女と結婚し，一つの新しい人種を作り上げんとした事と，やがて，新大陸発見と共にアメリカに赴いたイスパニア人が，土着民と結婚した事を思い出すとき，そこに一脈相通ずる何物かゞある事を感ぜざるを得ない．Real Academia Española の大辞典には，アラビア語に起源を有するも，現代イスパニア語として採用されている単語が4000語以上記録されている．従って，今，これをこゝに全部挙げる事が，如何に不可能であるかゞわかるであろう．但し，先述の如く，アラビア政権のとった特異な性格から，依然，これまでのラテン語を使う者が多く，従って，全般的に云って，アラビヤ的要素は，主として単語にのみ見られ，文の構造を根本的に変えるには至らなかった．尚，4000語に余るこれらの単語が全部純粋にアラビア語であるか否かは相当疑問があり，その語源のはっきりしない語が多少ある．たとえアラビア語が，ラテン語の如く，イスパニアの土語を全く消失せしめた程大きな影響は有さなかったにせよ，相当なものであった．回教徒文化の優越性については前章にても一寸触れたが，今は特に言語を通じてみた具体的検討を行ってみよう．

先づ，アラビア人は勤勉な働き手であった．農業について云うなら，彼等は熱心に米（arroz）をつくった．先づ苗床（almajara）を作り，水管（atarjea 或は arcadroz）で水を導き，時には水揚機（noria 又は azud）を使う事もあった．畑（alumnias）で出来た作物は納屋（alquería）に収めた．米の他にうまごやし（alfalfa），砂糖きび（caña de azúcar），野菜（alcachofa），南京（zanahorias），西瓜（sandías）等があった．農業に関する単語には，此の他，almatriche（水道），alcantarilla（溝に渡した小橋），atanor（排水管），aljibe（水槽），zanja（溝，下水），aceña（水車），alberca（貯水池）などがある．

農業と関連して，園芸についても，各家庭の裏庭には定って植込み場（arriates）があって，そこには季節の草花が絶えなかった．白百合（azucenas），レモンの花（azahar），月桂樹に似た adelfa の木，albelías，arrayán 等々．又植物ではこの他，naranjas（ミカンの木），limón（レモンの木），albaricoques（杏），toronjo（柚子）があり，aceituna（オリーブ実）は彼等の好

物だった．昼食事（almuerzo）など，彼等は ají（唐がらし）と一しよに酢漬けにした（escabeche）として食べた．

古来商人として知られているアラビア人は流石に多くの商業用語を残している．荷物を積んだ carabana（隊商）は，arriero 又は recuero（馬方）に導かれて，毎週開かれる市場（zoco）にやって来る．品物は ceremines（穀類）が主だが，その他，食物では，メリケン粉と卵と魚肉で作られた団子（albóndiga）の様なものがあった．度量衡は勿論アラビア式で arroba, arrelde quintal, adarme 等は皆重さの単位である．穀物は特に一袋（fanega）幾らで売られる事があった．油（aceite）などは cahíces, azumbre（約2 *l*）等の単位で計られ，これには度量衡検査人（almotacén）がついていた．営業者に対しては alcabola, garrama, alfarda 等営業税が課されたが，徴税官は almojarife 或は alfardero と称せられていた．又税関（aduana）では科量（tarifa）は科量一覧表（arancel）に準じて，金貨（dinero）或は maravedí で支払われた．商品は普通倉庫（almacén）に保存された．その他，海損（averia），貯蓄（ahorro），安値（barato）等，商業に関する語は多い．

素晴しい回教寺院 Mezquita のの建築者たるアラビア人は，建築に於ても，少なからぬ用語をイスパニア語に与えている．今，その主なものゝ一部を拾ってみると，alhania（押入れ），ajimez（出窓），azotea（露台），tabique（仕切壁），acítara（家の両側の壁），alarifes（頭領），albañil（左官），alcantarilla（樋），alcázar（城），alcoba（寝室），azulejo（飾煉瓦），baldosa（敷煉瓦），zaguán（玄関），arrabá（窓の飾り），alcandara（干物台），alhaguín（瓦師），almarbate（角材），choza（小屋），barraca（バラック），rincón（角），sala（部屋）等々がある．

手工業の一種たる仕立て業も亦，東洋がその本場だった．仕立て屋（alfayate，もっとも現在ではロマンス系の sastre なる語が用いられている）は alformez（衣服の一種）を作り alquincel（合羽）を作り，又紗（cendal）の上衣（almaizar）を仕立てた．絨氈（alcatifa）の美しさは我々の知るところ．刺繍には屢々金銀糸（talco）が用いられた．モスリン織布（muselina），木綿厚織物（fustán），錦（aceituni），絹織物（tabí），敷物（alfombra）をはじめ，チョッキ（chupa），ワイシャツ（camisa），ズボン下（zaragüellas），外套（gabán）なども作られ，材料も綿（algodón），羊毛（cachemir）等が，絹の他に用いられた．コーランを入れる革袋（tahalí）は山羊の鞣皮（banda）で作られ，浮飾（guadamecí）が施されてあった．

行政について述べるならば，八世紀間に及ぶ統治は，ローマ帝国の影響が幾何にこれまで大きかったとは云え，幾分なりともアラビア的なものを残す事になったのは，蓋し当然の事である．主なものを拾ってみると，先づ alcalde（市長），alcaide（巡視），zalmedinas（司法官），alguacil（警官），barrio（都市の一区画），aldea（村）などがある．法律上の用語としては al-

bacea（遺言執行人），albarán（未婚の）等が昔日の面影をとゞめている．

科学の部門においては，アラビアは，当時の世界で最も進歩した国であった．数学用語としての cero（零），cifra（数字），guarismo（アラビア数字），álgebra（代数）をはじめ，化学では alambique 又は alguitaras（蒸溜器），alcalís（アルカリー），alcohol（アルコール）などの語を残した．

天文，気象面では，zenit（頂上），garbino（西南風），monzón（季節風），tifón（台風），aldebarán（星の名），ange（頂上），nadir（天底点），almanaque（暦，これは“数える”の意から来ている）．医学用語としては albayalde（白鉛），alquermes（興奮飲料），alcanfor（樟脳），solimán（昇汞），金属，鉱物では zapa（ワニ皮模様の金），ambar（琥白），azufre（硫黄），almagre（赫土），albayalde（炭酸鉛），azogue（水銀），alumbre（明礬）など，皆アラビヤ起源である．

工業上の用語として残っているのは，arsenal（工敞），alfarero（陶工），alcaller（陶工場）で，後者からは taza（茶わん），jarro（壺，瓶）などが作られた．

音楽でアラビヤ語系の単語の多いのは主として楽器名である．atabal（小太鼓），laud（絃楽器の一種），rabel（マンドリン型の三弦楽器），gaita（風笛の一種），guitarra（ギター），tambol（太鼓），adufe（パンデレータの一種），cítara（三弦の楽器），ajabeba（笛の一種），añafil（ラッパ），alboque（風笛），guzla（一絃楽器）など．

動物の名前にも，アラビヤ語に起源を有するものが少くない．たとえば，pato（あひる），ganso（鵞鳥），loro 又は papagayo（おうむ），alhoja（鳥の一種），garza（鷺），buho（ふくろう）等の鳥類をはじめ，bonito（かつお），girafa（きりん），jabalí（猪），caimán（鰐），galápago（亀），perro（犬）など．

社会現象を表す言葉には asesino（刺客），bazar（慈善市），alboroto（騒動），fonda（一種のホテル）など，又 coima（賄賂）もアラビア語から来ているが，これは如何にもよく彼等の生活態度を表している．

最後に，軍事用語についても二三述べなければならない．アラビア人は非常に乗馬に秀れていた．騎手（alfarás）は拍車（acicate）の音も高らかに，あぶみを短かくした，jineta と称せられた乗馬法で，手には青龍刀に似た太刀（alfauje）を，或は投槍（azagaya）を持ち，一大叫声（algarada）と共に，逃げゆく敵の背後（zaga）から，折から響くラッパ（añafil）の音に鼓舞されて攻め込んだ．夜になると夜襲（rabato）を敢行し，テント（alfaneque）の外では敵に備えて哨兵（atalaya）が不眠の警戒に当っていた．若者達（zagales）は楯（adarga）を手にし，箙（aljaba）に矢をつめ，旗手（alférez）を先頭に，勇ましく戦場に赴き，城塞（alcázar）で

は，城主（alcaide）が絶えず敵の来襲を監視していた，と云う有様であった．

これまでに見た単語は殆んど全部が名詞であった．而もそれは具象名詞が主であった．これはアラビア人の実行力を示す一つの標しでもある．今，名詞以外の品詞についてみると，先づ形容詞では，azul（青色の），amarillo（黄色の），añil（藍色の），carmesí（濃紅色の）等，色彩に関するものの他，baladí（つまらぬ），baldío（無駄な），hacino（けちな），mezquino（下賤な），andrajo（ぼろを着た），beduino（じっとして居る事のない），galán（女にやさしい〔男〕），mohino（不快な），horroroso（恐ろしい），fanfarrón（ほら吹きの），gandul（野ばんな）など或る共通した傾向の形容詞がある．前置詞としては hasta（……まで〔時間的，空間的に〕），動詞には He aquí，hélo（こゝに存す）などが見受けられる．繰返して云うが，以上挙げた単語は何れも数多あるものゝ中の，ほんの一例に過ぎぬもので，それを全部こゝに収録せんと企てる事は，此の限られた紙面に辞書を挿入するにも似た不可能事である．

偖，イスパニア語として現代用いられているこうした単語の中には，更にそれが他国語に由来する場合があるのは，ラテン語に於けると同様である．例えば alcanfor（樟脳），ajedrez（将棋）は，元来アラビア語ではなく，サンスクリット語から来たものである．又，jazmin（ジャスミン），naranja（みかん）其の他幾慕かの果実，草花の名，azul（青い），escarlata（緋の）などはペルシャ語より来ている．ギリシャ語からアラビア語に入り次にイスパニア語となった単語には arroz（米）<*gr.* óayza, azufaifa（果実）<*gr.* Zizyphon, adarme（重量単位）<*ar.* adirbem < *gr.* drachmé, alambique（蒸溜器）<*ar.* alanbic<*gr.* ambix（器），alquimia（練金術）>*ar.* alquimia<*gr.* Chymeia acelga（草名）<*ar.* acilca<*gr.* sikelós などがあり，又，ラテン語でアラビア語に入った単語も少くない．alberchigo（杏）<*ar.* alfirsic<*lat.* persicum, almud（穀量）<*lat.* modius, alcazar（城）<*ar.* alcaçr<*lat.* castrum 等はその一例である．こゝで問題となるのは，これらの単語がアラビア人のイスパニア侵入以前に，既にラテン語から入っていたか，或は侵入後，八世紀にわたるキリスト教徒との共存中に，言語の複雑な相互影響で，アラビア語が新たに採用したものなのか，時により判然しない場合がある事である．事実，侵入後，アラビア語の勢力はイスパニアに於て益々増大し，一時はラテン語を退ける迄に至ったが，mozárabes 達の多く居た事実にかんがみ，ラテン語から吸収摂取した言葉も可成りあった．その一例が，アラビア人作家にして一月（enero）を yanáir とかき（尤もラテン語では ianuarius と云われ enero はその進化した形である），タンボリン（pandero）を pandeiro と書いた記録がある．尚これらは音声学上の問題と密接な関係にある故，次章に於て取扱う事にする．それに先立ち，アラビア起源の固有名詞，特に地名（toponimia）について考察してみよう．Miguel Asín Palacios 氏は1944年出版された著書 "Contribución a la toponimia árabe

de España" に1500余のイスパニア地名を挙げ且つその元義を説明し更に巻末には，420余の地名で，恐らくはアラビア起源ならんと思われるものを収録している．この数字からしても如何に8世紀間のアラビア人の存在が，大きな意義をもっているかゞ伺われる．こゝには只，その一部分を挙げることにする．括弧内は洲名を示す．

Aceca (Toledo) = (道). Ahín (Castellón) = (泉), Alaraz (Salamanca) = (田舎), La Mancha (Castilla la Nueva) = (高原), Albojaira (Almería) = (沼沢), Alborote (Granada) = 柏, Alcalá (Cádiz, Castellón 及びその他) = (城), Algarbe (Sevilla) = (西), Algarra (Cuenca) = (白い), Algeciras (Cádiz) = (島, 半島), Alhambra (Ciudad Real) = (赤い), Almadraz (Toledo) = (時代), Almería (Almería) = (見張番), Almodóvar (Ciudad Real) = (丸い), Azanaque (Sevilla) = (道路), Benamahoma (Cádiz) = (マホマの家) 其他 Beni で終る地名多し〔Beni は (……の息子) に相当する接頭語で，イスパニア語では Lopez (Lope の息子の義) の ～ez に相当するもの．英語にも Richardson の如く接尾語がある如く見受ける〕. Calatayud (Zaragoza) = (Ayyūb の城), Cid (Alicante) = (主人), Doya (Alicante) = (納屋), Gibraltar (Cádiz) = (Tariq の山), Guadajoz (Córdoba, 川の名) = (濁流の河), Guadalajara (Guadalajara) = (石の多い河), Guadalcanal (Sevilla) = (堀割りの河), Guadarrama (Madrid) = (砂地の河), Manuel (Valencia) = (谷間より水の流れ出るところ), Medina (Cádiz, 他) = (都市), Medinaceli (Guadarajala) = (Salim の都市), Moguer (Huelva) = (洞穴), Murcia (Murcia) = (一定した，確実な), Nájera (Logroño) = (わし), Vega (Galicia 及び Asturías) = (平野), zahara (Cádiz) = (輝く).

第　四　章

音声学上のアラビズム

音声学上のアラビヤ語の特徴を述べる前に先づ我々は，その研究の困難さを充分に認識しなければならない．一般に，この分野程，各個人乃至は各国民間の独自の生き方をもっているものは少い．具体的に云って，例えば，イスパニア語が，同じ様にラテン語を母語とするロマンス語であっても，フランス語と，或はイタリア語と，ポルトガル語とその発音乃至は綴字が異るのは，1つや2つの影響によるものではない．先づ superstratum と substratum との関係が考えられよう．又，気候の差異も見逃し得ざる要素であり，生活環境から来る言語習慣と云う事も少なからず力を有している．アラビア語と，当時ようやくラテン語から neo-latin に移行しつゝあったキリスト教イスパニア国との言語関係についてみるに，それは，一応，superstratum，即ち外部

より及ぼされた言語要素と考えられると同時に，相互の影響と云う形をとっている．複雑極まる発音上の諸影響から，今，アラビズムの特徴を挙げてみよう．

先づアラビヤ語の破擦歯音はロマンス語の ç (ts) 及び z (dz) にとって代られた．又，アラビア語の帯気（有気）摩擦音 h' は，イスパニア語では alharaca（大仰），alheña（植物名）における h で表されていた．時にはそれが f で表される場合もあった．たとえば alh'ang>alfoz（敷地），alxordž>alforja（袋）など．或は又，h' 自身が消滅するのも稀ではなかった．h'aloq >aloque（白ブドー酒）．アラビア語には，p なる音素（fonema）は存在しなかった．従って，ラテン語の praecoqus（杏）はアラビア語では albarcoc と発音され，albaricoque となってイスパニア語になった．口蓋垂音 g は j の如く発音するのが常であった．従って Tago>Tajo となった．Imela 即ち強勢のある a が i に変り更に e に移る現象も，アラビズムの現れである．(Hispalis>Hispalia>Isbilia>Sevilla)・〔ʃ〕を j に発音せしめたのはアラビア語式発音の影響で，つまり，S>古代 x=š>j=x なる形でこれを表現する事が出来る．Sapone(石けん)>xabon >jabón と変ってゆき，sucu>xugo>jugo（ジュース）と変化したのは，イスパニア語の一切の s を x=š と発音した morisco（モーロ人にしてイスパニヤが再征服された時洗礼を受けてキリスト教徒となり，この地に住みついた者）の発音の影響である。彼等は次の様にしゃべっていた．〈Xean llevadox todox estos（これが皆持出されるとは，即ち Sean llevados todos estos の事）〉．イスパニア語に於て，語尾が i で終る単語は，動詞の活用形を除いては，アラビズムによるものである．Alfonsí, Centí, Marroquí 等の固有名詞の形容詞化の他 carmesí, baladí, jabalí など，みなそうである．前章に於ても少し述べたが，アラビア単語が，ギリシャ語，ラテン単語から来ている場合がある．その場合，s は j で，p は b で表された（これについては今しがた述べたところ）と同時に，ラテン語の st の代りに z が用いられた事も見逃してはならない．たとえば，*lat.* Pastinaca>biznaga（植物），*lat.* Caesar(a)gusta>*arab.* Saraqusta >*esp.* Çaragoça>Zaragoza（地名）．

一たびロマンス語として取入れられるや，アラビア単語はロマンス語と同様に音韻変化を行った．〔k〕は変化しなかった（mickin>mezquino）が二重母音 ai, au はカスティリア語及びカタラン語に e, o を与え（dai'a>*cast.* aldea（村），*cat.* aldea）ガリシアポルトガル語（Galicia と Portugal の国境地方に話される言葉で，イスパニア語ではあるが，むしろポルトガル語に近い）には ei, ou を与えた（>*port.* aldeia）．早期にイスパニア語にとり入れられた単語では，無声破裂音が有声化している（atob>adobe（土塀），alqutu>algodón 棉）．l-l, 及び n-n が l 及び ñ となる，二子音が合して口蓋化する現象を最後に挙げて本章を終えよう．

ar. annil>*esp.* añil（藍），*ar.* banna>*esp.* albañil（左官）; ballu'a>albellón（排水管）．

第　五　章

意味及び文章構造上のアラビズム

キリスト教徒と回教徒との共存がもたらしたものは，数千に上る東洋単語だけではなくして，ひろく深く，イスパニア人の精神にまで及んだ強い回教的思想である．イスパニア人が好むと好まざるに拘らず，長世紀にわたって彼等に滲み込んでいったこの思想は，今も尙，彼等の言語，習慣にその具体的名残りを見る事を得しめている．Moriscos を追放したイスパニアは，結局，民族的満足を感じはしたものゝ，これまでの如く，生活の各方面にわたって活躍していたこれら morisco のそう失と共に razón（理性的なもの）と vida（実生活的なもの），即ち，fe sin obras（働かず，只信仰のみに生きるか）と obras sin fe（信仰なき生活の営みを行うか）の間になやんだのである．

イスパニア語の文法構造は，単語の大量導入に比して，殆んど変化しなかったと云ってよい．これは既に述べ来った如く latin románica の全面的消去がなかった事による．但し彼等の習慣から来る言語の表現形式，たとえば ¡Ojalá¡（願わくば……ならん事を）＜ Wa sā'a-l-l'ah（quiera Dios で，神様が思召しにならん事をの意）とか，斗牛士を鼓舞したり，踊り子をはやしたりする時発せられる ¡olé!＜wa-l-lah（por Dios で神様よの意）などの簡単な文，或は，文の構造上は，ラテン語系のものであっても，その中に盛られてある思想が，アラビア独得であると云った場合が多い．その一つが，彼等アラビア人の礼儀作法から来るもので，例えば訪問客が，部屋に飾られてある額を讃めた時は，アラビア人の習慣としては「それは貴方のものです」（Es suyo）と云い，又，貴方はどちらにお住いですかと尋ねられて答えるのは，何街何番地と云ってから ahí tiene Vd, su casa（そこに貴方の家があります）と附加える．又，自分が食事中，側を通る者があれば必ず彼に ¡Venga Vd. a comer!（一しよに食べませんか？）と呼びかけるのが普通で，これを真面目に受けてはいけない．あくまでもそれは儀礼上の言葉である．それに対し答える言葉は，¡Que aproveche!（どうぞごゆっくり）である．これは現代イスパニア語を話す国々では頻繁用いられている．こうした例は，イスパニア中世文学作品にも数度繁く現れている．英雄詩 Poema del Cid の中で Alfonso VI が Cid の馬を讃めた．esse cavallo que tanto bien oí dezir…, que en todas nuestras tierras non ha tau buen varón（verso 3510）時，英雄はムスルマン式礼儀で「お贈り致しますからどうぞお受取り下さい」（Yo vos lo do en don; mandédesle tomar, señor），（verso 3113）と答えているが，流石に当時の事，王は D'esto non he sabor と云って受取らなかった．13世紀頃には何千を数えた公衆浴場は，

我が国で見られると同様，都市に設けられ，浴場の主人は石けん，タオル，熱湯を用意し，たゞ，男子は火木土と行き，女子が月水金の如く，週の中，入浴の日が決っていた．こうした習慣も1576年には法令により禁止されて今では殆んど見つからない．言語とは少し関係が薄いが，女子の manto tapado と称して顔を覆った習慣は，16世紀の事であったが，今も尚，遙々南米の地に，特に田舎地方に残っている．女子が，東洋風に床 estrado に坐したのも興味ある風習で，これは18世紀に至ってもまだ見えた．アルゼンチンの作家にして大政治家 Domingo Faustino Sarmiento（1811—1888）の家も，こうであったと彼の回想録に記されている．ラテン系の言葉にアラビア語的意味が附加された場合については一寸触れておいたが，palacio が宮殿の意味の他に，別荘，或は部屋の意味で用いられた．これはアラビア人の生活環境から来ている．又 Casa が本来の「家」の意味の他に，都市，民家の意で Poema del Cid に用いられている．vergüeuza は元来「恥」と云う意味を持っていたが，それが「名誉，忠誠」の義に用いられた．イスパニア人の性格の中枢をなす Pundonor，即ち，体面の意識は，案外，こうしたアラビア精神の一部面でもある訳だ．従って一見イスパニア固有のものと見做されるものも，その源に遡ると，それが外的要素である場合が少くない．先述の ¡Ojalá!, ¡Olé! にしても，又，彼等の云う Si Dios guiere（神がお望みなら，即ち「よかったら」の意）などにおける Dios（神）もキリスト教で云う神なのか，どうか，甚だ疑問である．イスパニア語で書かれた書翰を見る者は誰でも，その結辞の長いのに驚くであろう．日本語なら，さしずめ「敬具」で片附けるものを，イスパニア語では quedo de Vd. afmo. atto. S. S. q. b. s. m. と表現し，直訳すれば，「私は貴方に最も好意を寄せ，貴方の手に接吻するところの，丁寧で，間違いのない召使です」こゝに besar la mano（上記の b. s. m. に相当する）即ち手に又は足に接吻すると云う習慣も，アラビア式である．十九世紀に於ては，まだ紳士に淑女は beso a Vd. la mano（あなたのお手に接吻します）と云って別れ，紳士は a los pies de Vd. señora（奥様，あなたのお足許に）と答えていた．手にキッスする事が西欧封建主義と関連なく，イスパニアの歴史とのみ関連性を持つ事を強調しなければならぬ．その他，聖書コーランから来た諺や Bendita sea la madre que te parió（お前を生んだ母親に幸あれ）と美しい女を見て叫ぶ習慣をはじめ，元来非人称的表現を人称的にした（Amanecer は夜が明けるまで三人称複数形にしか使用されなかったが，後人称変化を行い Amanecí enfermo（私は朝おきると体の具合が悪かった）など述べねばならぬ事項は相当あるが，今は，文学の面で，アラビア語がイスパニアに（実はイスパニア語のみならず，フランス，英国，ドイツ，イタリー，ポルトガルにもであるが）及ぼした大きな影響の一つたるアラビア詩の形式 zejel を紹介して，此の稿を終えたいと思う．Zejel とは踊りのためによく用いられた形式で，その形は AA. ddda, eeca なる脚韻をふまれた十行詩である．この詩形式は，イスパニア中世文学の高峰をゆ

く Arcipreste de Hita (Hita の大僧正) の Libro de buen amor (よき恋の書) に, 間断なく現れ, Alfonso el Sabio (Abfonso 賢王) も Cántigas の中で此形式を盛んに用いている. 中世の文学にとゞまらず, アラビア文学の与えた影響は, 十七世紀の, いわゆる Barroco 時代のイスパニアの代表的詩人 Luis de Góngora y Argote (1561～1627) の作風にも及んでいる. 彼の詩に大きな影響を直接に与えたのは, アラビア詩人, Ibn Said である.

主な参考図書

1. Altamira, Rafael: "Manual de Historia de España" Ed. Sudamericana. Bs. As 1946.
2. A sín Palacios, Mignel: "Contribución a la toponimia árabe en España." Publicaciones de las escuelas de estudios árabes de Madrid y Granada. Sərie B.—No. 4, Madrid, 1944.
3. Castro, Américo; "España en su historia" Ed. Losada, Bs. As. 1948.
4. Díaz-Plaja, Guillermo: "La poesía lírica española" Colección Labor. Madrid, 1948 Zª ed.
5. González Polencia, Ángel: "Historia de le literatura arábigo española." Colección Labor, Madrid, 1945 2ª ed.
6. Lapese, Refael: "Historia de la lengua española" Escelicer S. L. Madrid. 1950, 2ª ed.
7. Léví-Provençal: "España musulmana hasta la caída del califato de Córdoba." Historia de España, Tomo Ⅲ. Espasa-Calpe, S. A., Madrid, 1950.
8. Menéndez Pidal, Ramón: "Manual de Gramática histórica española" Eepara Calpe. S. A. Madrid. 9ª ed. 1952.
9. 同上: "Orígenes del español." Espasa-Calpe, Madrid, 1950, 3ª ed.
10. 同上: "El idioma español en sus primeros tiempos." Colección Austral. No. 250. Madrid, 1951, 4ª ed.
11. Real Academia Española: "Diccionario de la langua española." Espasa-Calpe. Madrid, 1947, 17ª ed.
12. 服部四郎: 音声学 岩波全書131 1950 第一刷.